

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷三十四第

行發日一月八年一十和昭

論叢

地方税としての住居税

資金需要供給の金融緩慢逼迫

中立性

法學博士 神戸正雄
經濟學博士 小島昌太郎

時論

革新原理としての「民有國用」に就いて

經濟學博士 石川興二

日印貿易の再檢討

經濟學博士 谷口吉彦

研究

フイヒテに於ける國民の福祉

經濟學士 出口勇藏

講演

近時に於ける經濟觀と政策觀の變化に就いて

法學博士 河田嗣郎

說苑

ドイツ商業航空の新展開

法學士 吉川貫二

ルーテルの商業及利子論

經濟學士 澤崎堅造

土地問題と産業組合

經濟學博士 八木芳之助

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

講演

近時に於ける經濟觀と政策觀の變化に就て

昭和十一年五月三十日京都帝國大學經濟學會大會における講演

河田 嗣 郎

私も本日此經濟學會の盛大なる大會の末席を瀆しまして、簡單なお話を申上げることの出來ますのは、誠に感慨無量のもがあります、それは經濟學會の出來た時には私は其初めから直接に關係を致して居つたのであります、爾來私としては此學會の爲には相當の御奉公を申上げた積りで居るのであります、今日斯の如き盛大なる有様を見まして誠に歡喜に堪へないのであります、尙又大分久方振りに此方の教室に出て参りまして斯う講壇に立つて見ますと、何だか昔を憶ひ出しまして一入懐かしく思ふ次第であります。

さて今日は茲に掲げましたやうな風の意味のお話を申上げたいと思ふのでありますが、併し是は詳しく論じて参りますとなく、多くの時間を要するのでありますが、もう先程から皆様も大分名論卓説には食傷であらうと思ひますから、出來る限り簡單に要點だけを申上げて見たいと思ひます。

近時に於ける經濟に關する觀念や、經濟政策に關する觀念の變化に付きましては、既にお讀みになつたこと、思ひますが、獨逸のノイマーク教授の書いた「經濟政策の新しいイデオロギー」と云ふ書物は洵に手頃のもので、

要領よく出来て居りますから、まだお讀みにならない方には御一讀をお奨め申し上げますと共に、今日の私のお話も大體同氏の説明に則つてお話を申上げること致したるよからうと思ひます。

御承知のやうに、世界戦争以前と世界戦争以後とを比較致しますと、經濟とか政策と云ふものに關する根本觀念が著しく變つて來つゝあるやうでありまして、現に其變化の進行中にある、従つて私が是から申上げますことも唯其一つの傾向に付ての話でありまして、既に斯う云ふ風に觀念が變化してしまつたと云ふ意味ではありませんが、併し相當有力な一つの傾向として、さう云ふ傾向が進行しつゝある、さうして恐らくは皆様も大體はさう言つたやうな風に變化しつゝあることをお認めになるのではなからうか、又吾々としては或る程度まではさう云ふ有様を納得しなければならぬのではなからうかと云ふ風に思ふのであります、勿論斯う云ふ大きな時代的變化は唯世界戦争と云ふ一つの時期を境として、其以前と以後に於て截然と區別が出來ると云ふ風には參りませぬ、戦争前はハツキリ斯うであつたが、戦争以後はすつかり變つてしまつて、まるで廻り舞臺が廻つたやうに變る譯には參りませぬ、従つて吾々が變化の兆候と考へる傾向も戦前から既に窺ふことが出來ますが、併し何と申しましても、あの世界戦争と云ふ一つの大きな出來事は、何しろ戦争其ものが破壊的行爲であるから、所謂既成制度をばひどく叩き壊してしまつた、従つて時代の變化を窺ふに付ては、戦争前と戦争後とを一つの區切として比較して見ると云ふことは便利でなければならぬのであります。

然らば大體經濟と云ふものに對する考へ方が、戦争前と戦争後とに於てどう云ふ風に變つたかと申しますと、先づ吾々の頭に浮ぶことは、從來は經濟と云ふと何だか政治とか、教育とか、軍事とか云ふものとは違つたそれ自身の一つの世界である、政治が一つの世界であり、教育が一つの世界であり、軍事が一つの世界であるが如くに、經濟と云ふものは一つの世界であると云ふ風に考へて、従つて經濟の事に關する研究をしたり又いろ／＼と實

地政策を行ふ者は、それ自身としての世界に於ける經濟の事を處理する、其ことを研究する、其間に行はれる原理原則を探究すると云ふ考へ方を致して居つたのであります。

所が、近頃戦後に著しくなつた傾向は、經濟と云つても、政治と云つても、教育と云つても、其他あらゆる文化と云つても、それは畢竟するに吾々人生に實際行はれて居るものを、一つの見地から觀た人生の一表現に過ぎない、従つてお互ひに關聯したものであつて、詰り一つの纏まつた大きな人生と云ふものゝ全體を理解することなくしては、經濟の世界を理解することは出来ないし、又經濟の世界を理解する爲には政治の世界も、其他各般の世界をも、一つの聯絡關係を保ちながら考へなければならん、詰り吾々の經濟と云ふものは、一つの纏まつたボディである、ウィルトシヤフツ、コンプレクスと云ふ言葉を使ひますが、是は獨り經濟に限らず、吾々の社會生活自體が一つの纏まつたものである、其纏まつたものが生成發育を遂げて行く、其一つの生の表現として吾々は、或る見地から經濟と云ふものを考へるに過ぎない、近頃「生きた經濟」と云ふやうなことを申して居りますが、さう云ふ風に見て行かなければならぬと考へるのであります、斯う云ふ傾向は明かに一つの著しい傾向であらうと思ひます。

今一つは戦争前既に早くアダム・スミス頃から養はれた考でありますが、其考は、經濟と云ふ世界は物の世界である、斯う云ふ考へ方である、財を生産し、財を交易し、財を分配し、財を消費する財の世界を經濟の世界と云ふ、斯う云ふやうな考へ方、従つて之に關する研究をする時には、恰も自然科学者が日月星辰を見るが如くに財の世界を見て行く、斯う云ふ言葉が適當であるかどうか分りませんが、之を客觀的に觀照して其間に存する原理原則を見付けやう、斯う云ふ態度を執つて居る、であるからアダム・スミスの書物を御覽になつてもそれは國々の富に關する研究、富が如何にして出來るか、如何にして増加するか、之に關して研究すると云ふやうな標題

が付いて居る譯であります、斯う云ふ風な大體見方をして居つたのであります、従つて出来る限りそこに倫理的の見地とか、其他いろ／＼の研究者として主觀的の要素を交へないやうに、純客觀性を見付けてそこに理論を建設しやう、斯う云ふ風に考へて居つたのであります、尤も戦争前でも獨逸の歴史派の如きは、斯の如き態度ではいけない、ロツシャーの有名な言葉に、經濟學の出發點も歸着點もそれは人間であると云ふことを申して居りますが、併しまだそれでも十分徹底に行かない、依然として物の世界であると云ふ觀念は強かつた、だから日本でも經濟界のことを財界、財の世界と考へる、此觀念は今日に至るまで依然として力強いものであるかも知れない。

所が戦争以後に於ける著しい傾向は、經濟と云ふものは、先程申しましたやうに見ること、關聯して、やはりそれは人生其ものであるから、勿論それは物財を行爲の對象とするけれども、唯行爲の對象として存するのみで、人間を離れて物財の世界に關する研究をするのが經濟學でもなければ、財の世界に於ける財の生産、交易、消費が經濟でもない、やはり是は人間としての生きた經濟と見なければならぬ、生きたものであるから、従つて其間にはいろ／＼と活動もあれば感情も交るし、又倫理や何かのことも交はるのである、斯う云ふ風に近頃考へて來た點も著しいものであらうと思ひます。

さう云ふ譯でありますからして、戦争前に於ける見方に於ては、經濟と云ふものは、それ自身が一つの世界であるから、其經濟が國家と云ふ組織内に於て行はれても、國家と云ふ權力を持つた團體であるにしても、其權力を濫りに振廻はして、經濟の世界をデスターブしてはいけない、成べくそつとして置く、さうして自由に放任して置けば、其世界は自からよくなつて行き發達して行く、然るに之を徒らに權力を振廻はして、餘計な干涉をしたり、餘計なおせつかいをする、自然的に動いて行くコースが亂されてよくない、國家は出来るだけ消極的

態度を執り、而も考へて見ると國家と云ふものは、是は或るフアンクションに依つて出來上つて居る、其フアンクションを行ふ爲のものに過ぎないから、定められたフアンクション以外に手を出すな、經濟の如きものは國家の司るフアンクションではない、各個人々々がやるべきことである、是が御承知の通りレッセ、フェールである、レッセフェールであればよろしい、アダム・スミス以後に於ける自由主義者等は極端に此考を示して居る、尤も其後に於ける獨逸あたりの傾向は幾らか之を緩和する傾向になつては居ましたが、併し戰後に於て著しい變化を見るに至つたのであります、さうして是がレッセ、フェールであると云ふことは、言換へると、經濟と云ふ世界には自から合理性が働いて、放任して置けば自らによくなると云ふ考が基礎をなして居る、是は經濟上に於ける一つのラシヨナリズム合理主義である、是は當時の考としては獨り經濟のみに關しての考でなく、もつと廣く合理主義を妥當せしめたのであるが、併し經濟の世界に對しては、やはりラシヨナリズムが基礎をなして居る、此が基礎をなすから放任して置けばよい、自然によくなる、日月星辰が法則に従つて動いて行くが如く、動植物が進化の法則に従つて自然のまゝに成生發育するが如くに、經濟は放任して置けば發展を遂げて行く、斯う云ふ風に考へて居つたのであります。

所が世界戰爭以後に於きましては、著しく此考が變つて來たことにお氣付きであらうと思ひます、是は一つには戰爭と云ふことに依つて齎らされた經濟界の混亂、其混亂狀態に直面して經濟と云ふものは、實に動いて居るものであると云ふことを目のあたり見ざるを得なかつたからでもあります、戰爭前には世の中が平和であつたから、經濟も靜かな發展を遂げた、所が戰爭後は非常に波瀾重疊と云ふことになつて居る、此波瀾重疊の動搖の際に直面したから、經濟と云ふものに對しても餘程考が變つて來たのであります、さうして其變つて來たのは從來の經濟的ラシヨナリズムを段々疑ひ、寧ろ段々否認するやうになつて來た、放任して置いて必ずしもよくならな

い、放任して置いた結果はどうかと云ふと、段々それは自己否定に陥つたではないか、本當にラシヨナリズムが妥當して居れば、幾ら經濟界が戦争其他の事情に依つて一時は混亂しても自から立直つて、又もとのやうに靜かな發展を遂げて行かなければならん、所がどうか、戦争に依つて打壞されている／＼動搖して結局世界的恐慌と云ふやうなキヤタストローフを迎へるやうになつた、あの恐慌と云ふ現象は、是は經濟の合理主義と云ふものゝ自己否定である、自己破産である、どうにも斯うにもならないぢやないか、放任して置いてはどうにもならない、惡くなるばかりである、斯う云ふ傾向を目のあたり見たのでありますからして、どうしても茲に一つの考へ方の變化を見ざるを得なくなつたのであります。

同時に今一つ考へを願ひたいことは、戦争前に於ける資本主義の發展時代に於ては、經濟は急速な發展を遂げ、國の富は著しく増加する、個人々々の間や階級的の區別こそあれ、段々と富を蓄積することが出来る、生活は裕になる、そこに一般思想界は何となく唯物思想的傾向が強くなつた、従つて、戦争前の著しい特色は、人生のあらゆる價值の中に於て、經濟價值と云ふものに非常に優越な地位を與へて居つた、價值には自から優劣がなければならぬが、其優劣の中に於て經濟價值の占むべき地位は、今頃の新しい傾向の人から考へれば、もつと／＼低い所に在るのが當然であるけれども、戦争前に於ける傾向としては、其價值を他のあらゆる文化的價值より、より以上の地位に置き、結局あらゆる價值を引くるめて見た人生其ものゝ人格價值と云ふものと比較しても、より以上のものであると云ふが如き錯覺をすら起したのである、人間にとつて何が大事であると言つても人格の價值ぐらゐ大事なものはない、然るに經濟價值を尊ぶ結果、其經濟價值を現はす貨幣を尊重し、貨幣に依つて計られる價值に非常な値打を與へる結果、名譽を犠牲にしても金を儲けやう、貞操を賣つても金を得やうと云ふやうなことになつた、而も世の中の人々がそれを怪しまないと云ふのは、時勢一般がさう云ふ風に經濟價值に優越な地

位を與へた爲であります、價値の優劣に於て占むべからざる地位を、經濟價値が占めたと云ふことになつて居るのであります、併し此事に付ても考へ直ほさなければならんと云ふことに氣がついて參りました。

今一度戰後に於ける著しき特徴を申して見ませうならば、一つは前に申したことから、經濟と云ふものに對して政治を加味すると云ふことである、經濟と云ふものは從來はそれ自身の世界であつて、國家の政策の如きものが之を攪亂してはいけない、それに對して國家の政策が加へられても或る限られたものに對してのみであると云ふやうな考へであつて、從來は政治と經濟と云ふものは切離して別の如く考へて居つた、所が是が段々變つて來まして、經濟と云ふものと、政治とか、政策とか云ふものは、そんなにはつきり區別が出来るものでない、のみならず、經濟がラシヨナリズムの基礎を失つたとするならば、而も其經濟なるものが全體としての吾々の生活の全表現の一方面に過ぎないとするならば、全體としての意思が之を導き整へて行くことは當然である、其意味に於て經濟に政策の意義が當然加はるべきである、従つて少し極端な言葉で言ふと、經濟なるものと政策なるものとは別なものではない、斯う云ふやうな考が餘程出て來て居るやうであります、是はいろいろの現象を御覽になれば必ずお氣付きになります、今日の流行語の統制經濟とか經濟管理と云ふやうな言葉は要するにその一つの具體的表現である、それでなくても、先程も問題になりましたが、オーストラリアが關稅をウンと高めて日本品を排斥すると云ふやうなことも、やはり是は經濟に對する政策的關與である、若し是が從來の如きものであつたならば、英吉利のフリー、ツレードであつたならばあんなことは出て來ない筈である、日本結構、獨逸、亞米利加大いに結構、千客萬來歡迎する態度でなければならん、——是が一つの徴候であります。

もう一つは、經濟と云ふものがさう云ふ風な人生生活であると致しまして、而も其人生に於ては人生が纏まつた全體としての人格を持ち、其人格價値と云ふものが一番優越の地位を占めなければならぬものであるといふ所

から、近頃の新しい傾向として經濟に倫理觀念を當嵌める、さうして之を規律するのに道德律を以てすると云ふ意味の經濟の倫理化と云ふか、經濟の道德化と云ふかモラリジールンク是が著しい傾向であります、先程高原さんからお話のありました、國際資源の再分配問題、此問題の如きでもやはり一種の倫理的の觀念が基礎になつて居ります、恰も所謂社會政策に於て、從來社會内に於ける富の分配を公平にしなければならん、さうして茲にはソシアル、ジャスチスが實現しなければならんと云ふ考へ方を國際經濟相互の間に當嵌めて、一種の規律を造つて行く、先程高原さんは共存共榮と云ふことを以て指導原理とすると云ふことを仰しやつたのであります、共存共榮と云ふことは、吾々個人々々お互の人格を尊重しお互が共存共榮するが如く、國家も各々其獨立を尊重して、各々が手を携へて生きて行くべきである、所謂 “do live and let live” である、この “do live and let live” と云ふことは、どうしても一種の道德的の觀念に立脚しなければならん、斯う云ふ觀念を國際間にまで及ぼさうとするのであるから、況んや一國內に於ける經濟に對しては、出来る限りこれをモライズして行く、斯う云ふ風に考へて來るのは當然であります、而も其モーラルは單純な個人的の道德ではない、一種の社會的の道德を加へて行くと云ふことであることは言ふまでもありませんが、さう云ふ風になつて行きつゝあるのであります、之をしないと云ふと、從來の單純なる自由競争では世の中は紛糾錯雜するばかりである、強弱相啞み合ふ世界に於ては戰爭の絶え間がない、又社會内に於ては階級間に階級鬭爭の絶え間がない、其結果は段々分離し、分裂して行くばかりである、だからどうしても、少くとも國家内に於ては一つの國家的結合と云ふことに作り上げて行く必要がある、斯う云ふ風に考へて來たのであります。

従つて、更にお考へを願ひたいことは、斯う云ふ風な傾向が出て來たものであるから、此新しい傾向には何となく資本主義の時代を乗越えて、而も資本主義以前の時代を回顧すると云ふ風がなんとなくあります、中世時代

への一つの回顧であります、中世時代は成程今日に較べては文明は低かつた、富の蓄積は今日とは迥も比較にならないけれども、中世と云ふものはなんとなく、所謂文化を持つて居つた、クルツールと云ふものを持つて居つた、所が資本主義はシヴィリゼーションを進めては行くけれども、資本主義それ自身のクルツールは極めて貧弱で、殆どないであらうが、併し中世時代には兎に角之を持つて居つたのである、其經濟生活を見ても、其經濟と云ふものは當時のクルツールと一致して居た、職人が桶を作るとして、桶を作ると云ふことは經濟行爲であるけれども、其桶を作るのにやはり自分の生命を打込んで一刀々々を樂んで作る、従つて作つたものを見ると是はゲテ物であるけれども、ゲテ物としてのそこになんとも言へない味ひがある、斯う云ふのが中世の職人の仕事である、併し今日はそんな手桶なんか作らない、バケツを大抵使ふ、バケツは安くて便利であるけれども、バケツにどれだけ藝術的の味ひが出て居りますか、妙な言葉であります、資本主義と云ふものはバケツ文明を以てよく象徴して居るのではないか、斯う云ふ意味から、よく使ふ言葉であります、よき古き時代グッド、オールド、タイムと云つたやうな言葉を使ひます、中世時代を顧みて、あの當時はよかつたと云ふやうな心持が動いて居る、従つて、先程申したノイマークは、此新しい變化の傾向は、一種のルネサンスに對する逆のルネサンスである、ゲーデン、ルネイサンスであると言つて居る、ルネイサンスは中世と云ふものを抑へつけて、舊いヒューマニズムを復活せしめた、所が此のヒューマニズムと云ふものは非常に現世主義で、富とか何とか云ふものを肯定するやうな立場である、併しもう一遍それを中世の宗教的のやうなものにしてはどうであらうか、宗教は阿片であるなどと言はれるけれども、なんとなくそこに、阿片かも知れないが陶醉するやうな、さう云ふものがあつてもよくはないであらうか、餘りにも現在は現世主義が行過ぎたのであるから、もう一遍ルネサンスを逆に行かうと云ふ傾向、さう云ふやうなものではないかと思はれる。

斯う云ふのが大體の傾向でありますからして、従つて之を現實的に見ますと云ふと、今日の一切の經濟に對する考へ方が、國家主義の國に於てはいよ／＼さうであります、國家生活の必要を充たす爲に經濟を行ふと云ふことになるのであります、同時に又倫理道德の觀念を交へると云ふことの爲に、經濟界に於けるい／＼の現象をば、道德的に整へて行かうと云ふ努力が現はれて來て居ります。

一々その實際的な表はれを申上げることが出来ませぬが、著しい所だけを申上げませうならば、例へば正當價格ジャスト、プライス或はライシヤス、プライス、斯う云ふ觀念が近頃又餘程有力になつて來たやうであります、是と同様に、利子に對しても正當利子の觀念、或る場合には利子を否定し、否定しない場合に於ても、正當利子と云ふ風な考を實現しようと云ふ努力が現はれた、賃銀の如きものは愈々正當賃銀を實現しなければならんと云ふ風に考へる、さうして又利潤と云ふものに對しても利潤の是非を批判しよう、斯う云ふ考が出て來たのであります、近頃チヨイ／＼新聞雜誌などで日本に於ても之を見るのは、なんとか利潤の制限をしようと云ふやうな考が出て來た、併しこんなことは從來の經濟觀念からしたならば寧ろ笑はれものである、價格は經濟界に於ける働きとして自から出來上がる法則があつて、それに依つて出來上がる、ジャストでもアンジャストでもない、賃銀は賃銀で、それは勞働の需要供給の關係で出來上がる、其出來上がる賃銀は人々の勞力價值に比例すべきであるけれども、即ち價格決定の原則が妥當すべきであるけれども、それで勞働者が生きて行けるかどうか、それは經濟の知つたことではない、生きて行けても行けなくても、勞働の需要が多くて供給が少ければ賃銀は高い、之と逆の場合は安いと云ふ考である、又利潤にしても、能力のある人が金を儲けるのに何の不思議がある、事業を甘くやつた人が金を儲ける、それは事業をやるが爲に當然に取得すべきものである、何の不思議もないと云ふ考へ方である、併しさう云ふ考へ方に對して、近頃之にジャスト、アンジャストと云ふやうな考を交へやうとし

て居る、先程お話の中に、近頃は所有と云ふことが詰らんものになりかけたと云ふことがありましたが、所有と云ふものに對しても、從來の考は、之は非常に神聖なものであるとして、苟くも之を侵してはならない、出来る限り法律に依つて護らなければならぬと云ふ考であつた、所が近頃の傾向は、一體物を所有すると云ふことは、道德的に正しいことであらうかどうか、先づ一遍之を批判して見ようと云ふことになつた、殊に土地に對する所有の如きものは、羅馬法的所有權の觀念を認めることが果して正しいかどうか、此考は是は戦争前からもありましたが、近頃特に著しくなつたのであります、正に所有權に對する疑ひが出て來たのであります、是もやはりモラルを入れて行かうと云ふ考が當然出て來るのであります、又今日の考では農業を保護しよう、中小商工業を保護しよう、さうして之に依つて國家經濟を整へよう、之に依つて經濟生活を堅實にして行く、斯う云ふ考へ方も出て來たのであります。

もう一つ申上げたいことは、なんとなく傾向が中世的回顧的要素を含んで居るが故に、最近の傾向としては、なんとなく慾を制して行かうと云ふ制慾的の考もチラホラ出て居る、是は資本主義の如きものでありましたならば、慾を進めて行く、働いて儲ける、儲けて發展する、發展して儲けるから愈々發展する、益々充實すると云ふ考へ方でヒューマニズムは人本主義であるが、それを經濟的に解釋して行けば、幾らでも働いて幾らでも儲ける、幾らでも富む、富めば贅澤の仕放題であると云ふことになる。然るに、近頃の傾向のやうに人間は富むと云ふことが尊いのではない、國も亦富を作ることだけが譽れではないと云ふ風に考へて來ると云ふと、資本主義に比較して、なんとなく幾らか制慾的の考が出て來た、尤も之には二通りあります、其一つは今日要求せられるやうな國家生活を中心として行き、經濟の政治化を行つて行くと云ふことになると、殊に中小商工業や農業を基礎としての經濟を組織して行くことになると、金が儲からなくなるであらうが、金が儲からなくなると云ふことは、詰

り新しい社會に堅實性を持たす爲の一つのコストと見てもよい、其コストを拂はなければならん、其爲に金は儲からなくなり、貿易は幾らか退歩して參るかも知れない、國際貸借上のバランスは幾らか悪くなるかも知れない、つまり發展すると云ふ見地から行けば、やゝ退歩するやうな見地になるかも知れないが、其代り國內がシツクリ出來上つて國家内部に於ける調和も出來、堅實性も増すとすれば其位の犠牲は拂つてもよい、それが要するに新しい社會生活を買ふ爲のコストであると云ふ風に考へるのが一つの意味である、もう一つは人間はもつと享樂的の考をやめなくてはならぬ、資本主義は餘りに享樂觀を進み過ぎた、もつと享樂的人生感を抑へて行かなければならん、宗教は一體此世を幾らか否定する、さうして彼岸と云ふものに人生の價値を認めて居る、だから此世の中に於て富まふとか、此世の中に於て裕かにやらうとか云ふやうなことは成べく抑へて、寧ろ彼岸に於ける永遠の生命の爲に努力する、心の貧しき者は幸なりと言つて居る、富める者の天國に行くことのむづかしいのは、駱駝が針の穴を通る程むづかしいともいつてゐる、是は慾を出來る限りさう云ふ物質的意味では收縮して、其代り精神的に充實して、來世に於ける永遠の生命を獲得しようと云ふのであります、所がヒューマニズムは之に反して、此世の中に於ける人生を豊富にして行かふ、さうして、よい意味に於ても悪い意味に於ても享樂と云ふことに重きを置いて居るのである、所が今日は餘り極端な享樂が行はれた結果、餘りにも享樂主義に趨り過ぎて、殊に嘆はしいことは、諸君をさう言ふのではありませんが、今の若い人は非常に享樂主義になつて、人生に對する理想を失つてしまつて居る、それは一つは世の中が不安定で、殊に就職難とか何とか云ふことがあるからさうなるのかも知れませんが、兎に角其日々を生きて行く、甚だしいのは刹那々々を生きて行く、是は餘りに人生を安價に見つもあり過ぎて居る、是は要するに人生に對する本當のモラルの立脚地がないからである、もつとモラルな立脚地を作つて人生の眞意義と云ふものを擱んで行くやうにする、さうして先程申上げましたやうに、

經濟價值以上の價值があると云ふことを明かに認識して、それが實現するやうに努力する人生を作らなければならんと云ふ風に考へて來たのである。

さう云ふ風でありますから、いろ／＼先程申しました通り、正當價格とか正當賃銀とか云ふやうなことも出て來るのでありますが、試に其中の一つだけ、正當價格に對する現在の人々の希求する所を窺つて戴きたい、是は尤も、社會主義の如きも或る程度に於てはさう云ふ正當價格に於ける要求を持つて居るのでありますけれども、それより幾らか違つた意味で、或は更により以上の力を持つてさう云ふ正當價格の考などが出て來たのである。之を促した原因又は事情は、一つは世界的恐慌に依る物價下落、殊に農産物の價格が非常に下落して殆ど生産費を償ふことが出來ない、それが爲に働けども働けども追つつかない、啄木の歌に、幾ら働いても働いても自分の生活がよくならない、デット手を見ると云ふやうなのがあつたと思ひますが、さう云ふ風に考へて來ると、どうも今日の價格現象と云ふものを、自然のものであるからラショナルであると云ふて放置して置いてよいものかどうか、斯う云ふ風に考へて來ざるを得なくなるのであります、又工業品と農産品とは價格狀況として缺狀の現象が出て來る、是も資本主義の立場から云ふならば、さう云ふ風になるのが自然の成行きで、さうなるのは仕方がないぢやないかと云ふけれども、併しそれでは到底やつて行けない多くの人々が出て來るのであつて、是が自然であるからラショナルである、仕方がないと云つて濟まざるべきものであるかどうか、もつと價格と云ふことに付ては根本的檢討を加へる餘地がないかどうかと云ふことを考へて參つて來るのであります、茲に正當價格と云ふ考が頭を擡げて來るのでありますが、正當價格と云ふ意味にも二通りあります、一つは資本主義的の意味であつて、何と云ひますか、公平價格と云ふか、此字もよくは當嵌らない、日本字にすると何だかピツタリ當りませんが、英語で言へば之をフェア、プライス或は獨逸語でリヒチガー、プライス斯う云ふ言葉で現はさるべき

で、自由競争市場に於て自由なる需要と自由なる供給とが自由に協合して、所謂フェア、エキステンジが行はれて即ちフェア、プレーが行はれて出来上がる價格がフェア、プライスである、其價格が安いとか高いとか云ふことは、それを作つた人が生きて行けるか行けないかと云ふことと比較すべきものではない、果してその市場が眞にフリー、マーケットであるかどうか、其自由市場に於て自由競争が行はれるかどうかと云ふことを考へなければならん、斯う云ふ意味の正當價格ならばそれは從來の資本主義の世の中に於て之を實現しなければならんとせられて居たものである、マーシャルの經濟原論に於て、かゝる價格を作上げるに付て需給の均衡と云ふことをやかましく言つたのはそれであり、所が只今申すのはさう云ふ意味ではない、それも結構であるが、其以上に道徳的に考へて見て、果してそれがジャストであるかないか、グレヒトであるかないか、斯う云ふ道徳的批判を加へての意味に於ける正當價格と云ふものを要求することになつて來たのであります。例へば此變化を一つの政策の上に卑近な所に引きつけて考へるならば、我が國に於て米の價格に對する政策が行はれて居る、所が之を行ふに付て資本主義的のフェア、プライスを實現しようと云ふ考へ方と、道徳的な正當價格を實現しようと云ふ考へ方とは違ひます、米を作るのに何程のコストを要して居るか、生産費は幾らであるかと云ふやうなことを考へて、其生産費を償はないやうなことでは困る、幾らそれが需要供給の關係から見た價格であつても、生産費以下になるやうでは困る、だから生産費を標準として價格の調節をする、斯う云ふ考へ方は、是はなんとなく資本主義的であつて、價格をよくして行かう、正しい價格を作らうと云ふ努力ではあるけれども、やはりそれは物本位的な考へ方に傾いて居ります、純粹の自由主義なら放任して置く、併しそれが一步進んで、それを統制して行かうと云ふ場合に於ても尙ほ此意味に於てコストを標準にして行かうと云ふのは幾らか資本主義であります、更にもう一つ之が進んで、米の價格は之を作る人がそれを作つて生きて行き、それを賣つて代價を得ること

とに依つて生きて行くのだから、米の價格の如きは之を作る農民が、世間普通の生活標準に於ける生活をなし得る程度の所得にありつく程度のもでなければならん、それが本當のデヤスト、ブライスである、斯う云ふ風に考へる、さうすると、それは人間としての米の生産者を、人間らしく生かして行くが爲の價格と云ふことになつて、非常に人間的になつて来る、其考へ方は從來のやうに物の世界に於ける價格であるから物を作るに要する費用といふ風に考へないで、人がやる經濟であるから之をやつて、それを唯一の生活の資源として人間が生きて行くに適當する價格でなければならんと考へるのであるから、非常に倫理的であります、又賃銀の如きものに至つてもさうである、賃銀は自由主義經濟で行くならば、唯需要供給の關係で出来る賃銀だから、勞働の需給が自由に行はれ、自由競争の結果出來た價格としての賃銀である限り飽までそれはフェアであると思へるのです。所が今申上げたやうに人間的要素を加へて行くならば、賃銀の如きものは、やはり勞働者がそれを得ることに依つてのみ生きて行くので、それが得られなければ生きられない、それが生活に不足するならば慘めな生活をしなければならぬのだから、賃銀は正當な賃銀としては、勞働者が人間として其時々々に於ける國民的生活標準とした生活の出来るだけの生活を保障する賃銀、是が正當の賃銀であると、斯う考へるのであります。此考は戰前にもある、例へば御承知のリビング、ウェージの議論もそれであり、苟くも勞働者は生きて行かなければならぬのだから、生きて行くと云ふことを保障する意味の賃銀でなければならぬ、所が從來の個人主義は全然生活と賃銀を別個の原則から行つて行かうとして居る、共產主義の如きは此間を密接に結びつけて行かうとする、其意味に於て共產主義の主張にも聽くべき所はある、少くとも賃銀はそれに依つて生きて行けるだけの賃銀でなければならぬと主張する議論である。更に進んで其生活と云ふものを個人的に考へるならば、それは主人は主人、妻君は妻君である。妻君もやはり何處かへ働きに出るか或は内職をしなければならぬ、更に子供はどうする、子供は多くても少

くてもさう云ふことは從來の賃銀は一切考慮しなかつたのである。併し苟くもリヴィング、ウェージたるべきであるならば子供の多い人も少ない人も同じやうに取扱つてはいけないと云ふやうな考から茲に又ファミリー、ウェージと云ふやうな考も出て來たのであつて、さう云ふ制度を作つて子供の多い人間と少ない人間を區別する、子供の多い人は安心して働けるシステムを作るといふのであります。斯う云ふことは既にオーストラリアの或る州で試みられたことがあります、斯う云ふ考が今日では愈々以て發展して行くのではなからうかと思はれます。

すべて斯う云ふ風に考へますと、先程申上げました通り、今日の傾向は從來の、物本位の物の世界としての經濟と云ふものに對して、人間本位的人間經濟觀念より立脚することになるのであります。メンシエン、エコノミー即ち人間經濟と云ふことをよく使ひますが、從來のやうにキューター、エコノミー即ち物財經濟でなくて人間經濟を作り上げて行かうと云ふ考がこれであり、そして苟くも人間經濟である限り、そこにモラルがなくはならぬ。同時に其人生はロビンソン・クルーソーのやうな孤立生活ではなく、今日の纏まつた社會的生活をして居るのでありますから、國家としての共同生活が完全に調和がとれ、生き／＼と發展して行くやうな意味に於て、國家の意思を以て之を整へて行く、其統制の下に進んで行くものでなければならんと云ふことになります。従つて經濟のモラリゼーションと云ふこと、經濟のポリチカリゼーションと云ふことが起きて來る、是が今日に於ける非常に著しい傾向であります。さうして此傾向は唯獨り經濟と云ふ生活表現に於て見るのみならず、吾々の生活のあらゆる視角から觀たあらゆる表現に對して考へられることではなからうかと思ふのであります。

まだ段々お話を申上げたいこともありますが、時間も遅くなりましたから、これで御免を蒙ります。(拍手)